

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(十二)

津 守 真

形をくずすことと、形が生れること

四歳になってから新しく入った子どもとの最初のふれ合いは、三歳児の新入のときとは異なった触感がある。四月に三歳児とふれる感じは、柔らかくて、うまく気持ちいが会うと、すつと近寄ってくる。そのあとは、砂場に出たときも、砂に指をつっこんだり、砂をさらさらと落したり、単純で原始的なことから入ってゆくと、じきに自分で遊べるようになることをしばし経験する。四歳の新入児は、最初からことばで近寄ってきたり、形になった顔や字がかけると自慢してきたり、砂場に出たときも、トンネルを掘ってくれと頼んだりする。新入園児であったも、四歳の子どもは、三歳の子どもよりも一段とそれぞれ

の経験を積んでいるので、それが既製の型となって、新しい場面では、子ども自身が、自分らしさを發揮して動けるようになることがたいせつであるから、そうできるためには、既製の型が破られねばならないこともあるのだと思う。

四月十八日

新入児Iが、庭から入ってきて、ひとりでぶらぶらしてから、机の前に座り、アルファベットをかいたり、東、西など漢字をかいたりする。私の方をちらちら見ながらかいているので、私は傍に座り、紙にぐしゃぐしゃな線をかく。すると、Iは、紙の上に点をいくつもかく。私は、いい調子だと思って見ている

と、その点を線で結んで、形らしいものにして私の顔を見る。

私は今までにも、はじめてふれた子どもとの間に、同様の経験がいくつもある。形になった顔ばかりかいて、自分の感情をこめた線をかかない子どもや、字をかくけれども錯画をかかない子どもとつき合うとき、私はしばしば、錯画のようなくしゃぐしゃな線をかき、あるいは、えのぐを使うことによって、自分の感じているところを表現できるようにする。いまここでは、その事例を引用することは省くけれども、同様の経験をもっている人も多いと思う。Iの場合には、私がぐしゃぐしゃの線をかいたら、点々を打ったけれども、それはこの子どものリズム感の表出ではなくて、点を結んで形を作るための点であった。

四月二十六日

私がままごのための野菜や魚を紙にかいて切ってやっていると、Iは、三角形に紙を切って、山とかき、「これなんなんだ？」という。私はわざと分らないふりをして、「うちだろう」というと、Iは「ほら 山ってかいてあるじゃないか」とい

う。そばにいた新入児のKは、「字がよめるの？」と驚いたようにいう。Iは「うん よめるよ」と得意になって、平然と答える。そのうちに、Iは、三角形を赤くぬり、その上部に線を数本噴出させて、「火山」という。

Iが三角形をかき、山という字をかくとき、私は、教えられた形にはまって自分らしさを発揮できていないIの姿を見る。Iは字がかけることで得意である。しかし、間もなく、Iはその三角形を赤いマジックでぬり、噴火させて、「火山」という。それは、形にだけはまっていることができないで、形を破ろうとするIの内的エネルギーのあらわれであろうか。あるいは、I自身の本来的な性質の表出であろうか。こういうのをかくようになると、早くも、形を破って内部から新たな活動が出てくる時も近いのではないかと感じられる。

六月十四日

朝、砂場で、私は、隣の組の子どもたちにひきとめられて、砂をやりはじめた。Iが砂場の向う側の保育室の出口から、私の方をむいて、「せんせ」とよぶ。はじめのうちは、こちらに

近寄ろうとしないで、何度も呼んでいる。私が「こっちにきて砂をやらないか」と呼ぶと、次第に近寄ってきて、私に最も近いところで砂をいじりはじめる。そのうちに、Iは、水道からバケツに水をくんで、砂場の中に流しはじめる。他の子どもたちもかなりふえて、山を積んでトンネルを掘ったり、溝を掘って水を流したり、砂場の遊びはかなり活発になる。Iは、砂を積んで山のように砂がぐさぐさに積み重なった上に、砂をかためないで、水をざざざあかける。他の子が、山に固めようとしても、その間もなく、水をかける。とめどなく、水を使う。

この日は、他の子どもも、かなり水を使っていたが、Iは、その中でも特別に、際限なく水を使った。とくに、砂をもり上げた山の上に、水をざざざあとかけた。私は傍にいて、Iは自分自身の何かを洗い流しているかのように感じていた。水を流すことにとりつかれたかのように流す。

こういう場面は、見方によっては、しつけができていないとか、監督が行きとどいていないとか見られるかもしれない。しかし、私には、Iはそのくらい、とりつかれたかのように水を流さなければ、内部に作られた「形」は破ることができないよ

うに思われた。

もう一度、最初の場面から考えてみる。最初の場面で、子どもが字をかいて、おとなの注目をひこうとするとき、私は戸惑い、うろたえる。子どもは、私が感心して見ることを期待しているようだが、私にはそのことを取り上げてほめる気持はない。ここに書かれた字は四歳のクラスに入園したばかりのこの子どもが、自分自身の内部から作り出そうとしてできた形ではないことを直ちに見てとれるからである。幼稚園に入る前に、多分、この子どもが心をこめて描いた線を、傍にいたおとなはその価値を認めることができなくて、形をかくことを要求してきたのだらうと察する。目鼻の整った人の顔から、字へと。子どもの描くものをよく見ていれば、形になる前に子どもが自分から描く線が、どんなに子どもの微妙な感情をあらわしており、それらの線によって作られた一枚の絵が、どんなに美しいものであるかは、心を籠めて注意深く見るならば誰にでもわかる。その線の重なりを通して、その時の感情の動きを見ることができると、そこには子どもの内面から溢れた個性がある。その中から次第に人の顔のような形が作られていくのであるし、

そうしてできてくる形には、そこに用いられる線に感情があり、そこにつくられる全体の構図は、子どものものであり、意味をもっている。四歳のクラスに入園したころに、形にならない線画、いわば錯画をかいている子どもは、少なからず見るこ
とができるが、それは少しも心配なことではなく、むしろこう
いう時期の長い子どもの中に、後になって描画としても伸びる
ものが多くあることは、しばしば見るところである。それとは
逆に、きまった形だけをかいて、自分自身の内面から出た線を
かかない子どもを見ると、その子どもの個性や子どもらしさは
どこにいったしまったのだろうかとか心配になる。ここでIが、
きちんとした字画の字をいくつもかいて、私の注目をひこうと
したとき、私にはそれがこの子どもの内面から出た形というけ
とれなかったのである。

この子どもが何かを描こうとしたときには、少くともその場
面に關しては、それまで、周囲のおとなは、その子どもの内面
の表現としての線や形ということを考えることをしなかったの
だろうと思う。しかし、幼稚園にきたときに、この子どもが、
幼稚園にいるおとなも、自分の内面からの表現を理解しないこ
とを前提にして幼稚園生活をするようになったら、こまると思

う。自分の内面とは別に、外からの要求された形に自分を適合
させるか、あるいはそれに反抗するかということにのみエネル
ギーを用いたのでは、幼稚園は意味がなくなってしまう。幼
稚園にいるおとなは、子ども自身の内面の表現を理解してくれて、
それを伸ばしてゆくに協力してくれるのだということを知
どもにも、漠然とながら分ってもらいたいと思う。幼稚園にお
いて、子どもとおとながつくり上げる社会と文化は、子どもの
人間としての個性を伸ばしてゆくところに、すなわち、まだ形
にならない時を尊重しつつ、内面から形が生み出される時のあ
ることを確信し、それがつくられたときには共に喜び——こう
して、さらに大きな眼で見るならば、おとなの世界が創造的に
つくり上げられてゆくところに意義があるのであると思う。

Iは、きちんとした三角形の中に「山」という字をかいた
後、その頂点から赤い線を噴出させ、「火山」と言った。それ
はI自身の表現であつた。それから、Iは砂場で山の上に水をさ
あざあ流した。一方は火で、他方は水で逆のようであるけれど、
も、両者とも山をくずすエネルギーを注いでいる点で共通であ
る。子ども自身がやらずにはいられない、こうした内面からの
行為に接するとき、それは無意味な行動ではなく、意味をもつ

たものであると思う。子どもにとっても、これはおとなから要求された行為ではなく、子ども自身の体験の意味の把握と、そこにふくまれる問題の解決を目指した行為となつていいると私は考える。ここの幼稚園では、おとなから与えられた形にはまっでゆくだけでは十分ではなく、自分自身の、自分らしい表現をしてゆくのであることを子どもが発見したとき、それまで自分のもつていた認識を破って、新しい自分になることが必要になる。その過程では、それまで自分が身につけた形を一度こわし、破ることも必要になる。子どもはこうしたことを意識的に認識して行動しているのではないことはもちろんである。子どもは身体的行動によつて認識し、反省し、行為する。しかし、その行為は全く無自覚なわけではない。その行為の中に、子ども自身の精神作業があり、それをやり終える子どもはすっかりした表情になつて、次のことをやりはじめる。

外から要求される形に適合して生きることが安全であり、それがいつか脱け出ることができない形になつていいることがある。あるいはまた、自分がつくり出した形であっても、時が経つうちに、それが硬化して自分自身を束縛するものとなつていいることがある。そうしたとき、本来の自分自身が創造的に動く

ようにするためには、それまでにつくられた形を何とかしなければならぬ。形から脱け出してそれを切り離して捨てるか、形を破り、こわし、くずし、あるいはまた形をとかす等々である。子どもたちが成長するときを見ていても、いろいろの仕方と既に作られた形を脱出して、新しい視野を求めてゆくようである。教科書やノートを焼いてしまつたり、押入れの隅に押しこめたり、机のひき出しを全部ひっくり返して整理したり、その仕方は、場合により人によつてさまざまである。そういうときには、もつたいないというような他人の評価は通用しない。自分自身の成長という大きな価値の前には、他のものは価値を失つてしまふ。

「かたち」(形)という日本語は、「かたまる」(固)、「かたい」(堅)等と同語源である。^{*}昔の人々も、形ができると、それは固まつて、堅くなつてしまひ、その形をかえることは困難なことだと思つたのだろう。人間の現実世界には、形は不可欠であるけれども、ひとたび形ができると、形ができる以前の状態にもどすことが困難なことをも示していいると思う。形に価値があると同様に、無形にも価値がある。すぐに形を作つてしまわないで、まして、形ができくる前の無形の動きの状態を無視

して形を与えてしまわないで、形が生れいずるのを見守りたいと思う。人間の精神の中に形ができてくるときには、形になる前の状態のときにも、精神の張りを伴った動きがある。子どもの遊びというのは、大体がこうした精神の動きの状態をいうのであると思う。形はその中に点在してあらわれてくるものである。多々の部分が無形の動きである。だから製作品でも、絵でも、ごっこ遊びでも、形としてできたものは、その無形の動きの部分とあわせて見ないと、その意味をとらえることができない。保育はいつでも、形の生れ出す以前の、子どもの精神や生活を相手にしており、形を生み出す苦悩を子どもと共にしている。精神にも肉体的にも大へんなのだと思う。しかも、形が出てくるときには、もはや保育者の手をはなれており、子どもは自分ひとりで作ったかのような、成就感と自信をもって、外に出てゆくのである。子どもの成長は、無形の動きから形を生み出し、また、それを無形の動きにもどして新たな形を生み出すことのくり返しであると言うこともできよう。

(つづく)

*(注)

漢字の「形」は、もともと「角ばった枠型」の形を描いた象形文字であるという。人を一定の枠内に押しこめ、手かせ足かせをはめること、鋳物の枠型などと同系の字であるという。

(藤堂明保・漢字語源辞典)

英語の Shape は、もともと、切るとか木を伐るという語から来たという。

